

## 宮沢賢治童話「やまなし」論

Study of MIYAZAWA Kenji's fairy tale "YAMANASHI"

高橋直美  
TAKAHASHI Naomi

### 要旨)

この物語は川底の青い幻燈であり、それは川底から川面を見上げているカニの眼を通して描かれた心象スケッチである。この作品は、弱肉強食や食物連鎖などの厳しい自然の現実や、生と死、生命の尊厳、父ガニの見守り、そして、自然の恵みなどの様々な森羅万象の理が、子ガニの兄弟の眼を通して美しく描かれている。それは、恐ろしくも慈悲深い大自然の営みそのものである。

この作品にはまた、因果応報と生命の循環が描かれている。魚を食べたことでかわせみは生命を永らえ、食べられた魚はかわせみの一部となって生き続ける。このように考えると、やまなしもまたカニの親子に食べられることでカニの一部となり、カニと共に生きるのである。しかも、やまなしの種が川に流されてどこかの浅瀬で芽吹けば、そこにもあらたな生命が誕生することになる。

この作品は生死を含む森羅万象の全てが因果応報によって存在することを示しているのである。

キーワード：やまなし、サワガニ、自然の理、生命、死、因果応報、心象スケッチ

### 1. はじめに

宮沢賢治の童話「やまなし」は小学校6年生の「国語6」（光村図書）の教科書にも掲載され、教材として子どもたちに親しまれている。多くの学習指導案等を見ると、最初に畑山博「イーハトーブの夢」（同教科書に資料として掲載）を読むことで作者について学習し、次に本文の「五月」と「十二月」（下書き稿では十一月）とを、「動と静」「冷と暖」「死と生」「かわせみとやまなし」（恐怖と幸福）などを対照させて読むことで登場人物の相互関係や心情などを捉えようとするものが多い。

本稿では、「やまなし」の主人公である子ガニの兄弟を中心に、岩手の谷川を舞台とした大自然の循環を読み解き、作品に込められた作者の想いを考察する。

### 2. 作品の舞台について

この作品の冒頭に「小さな谷川の底を写した二枚の青い幻燈です。」とある。岩手県は山地が多いため、小さな谷川も多く存在する。

---

\*東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科 Toyo Univ. Faculty of Human Life Design  
連絡先：〒115-8650 東京都北区赤羽台1-7-11

そのなかで、作品のタイトルでもあるやまなしの生息地を探索すると、片山寛則「新規ナシ遺伝資源としてのイワテヤマナシ～保全と利用の両立を目指して～」(『作物研究』64号 近畿作物・育種研究会 2019年)に、

北東北3県の全市町村を網羅した探索により、これまでに1500個体を超えるナシ属植物が発見され、その約8割が岩手県を南北に縦断する北上山地に分布していた。また山形県の飛鳥では100個体以上が高密度で自生していた。ナシ属植物は山間部の牧草地や溪流沿いなどに多く分布していた

とあることから、やまなし、正確にはイワテヤマナシが同じ岩手県内でも北上山地に多いことが分かる。

賢治作品で北上山地といえば種山ヶ原が有名であり、種山ヶ原を舞台とした作品には「風の又三郎」、  
「種山ヶ原」等がある。

「やまなし」の「二. 十二月」でサワガニの親子が明日行くという「イサド」という地名は、「風の又三郎」にも、

「伊佐戸の町の、電気工夫の童あ、山男に手足いしばらえてたふだ。」といつかだれかの話した言葉が、はっきり耳に聞こえて来ます。

として登場する。そして、多くの先行文献でこの「伊佐土」は岩谷堂であると指摘されている。

種山ヶ原は「住田町HP」(<https://www.town.sumita.iwate.jp/kanko/taneyama.html>)に、

種山ヶ原は、岩手県奥州市、気仙郡住田町、遠野市にまたがる物見山(種山)を頂点とした標高600~870mに位置した高原地帯です。北上高地の南西部の東西11km、南北20kmに及ぶ平原状の山で、物見山・大森山・立石などを総称して別名「種山高原」とも呼ばれています。緩やかな稜線の準平原地形と冷涼な気候から、藩政時代から馬の放牧地として利用されてきました。宮沢賢治がこよなく愛した高原として知られ、種山ヶ原の風景や気象を題材に、童話「風の又三郎」「種山ヶ原」、劇「種山ヶ原の夜」を残しています。

と記されている。種山ヶ原からイサドのモデルとされる岩谷堂に行く途中には、「原体剣舞連」で有名な旧原体村(岩手県奥州市江刺区田原村原体)があり、岩谷堂の横を流れる人首川も白山溪もある。

「鳥便り(カワセミ)」([HTTP://AKAITORI.TOBIIRO.JP/KAWASEMI.HTM](http://AKAITORI.TOBIIRO.JP/KAWASEMI.HTM))によると、かわせみは身体が小さいため、流れが穏やかな場所で、垂直に水深20cmくらいしか飛び込むことができないとあり、作品本文にも「上の方や横の方は、青くくらく鋼のように見えます。そのなめらかな天井を、つぶつぶ暗い泡が流れて行きます。」とあることから、作品の舞台は岩場の急流ではなく、流れがゆったりとして川床に岩が存在し、水深がそこそこあることが分かる。

そして、「二. 十二月」にも「白い柔らかな円石もころがって来、小さな錐の形の水晶の粒や、金雲母のかけらもながれて来てとまりました。」とあるが、金雲母について「ササラ風土見聞録 黄金の山々」([https://www.thr.mlit.go.jp/isawa/sasala/vol\\_45/vol45\\_2m.htm](https://www.thr.mlit.go.jp/isawa/sasala/vol_45/vol45_2m.htm))に、

全域に金を含めた鉱脈が埋まっているという北上高地のど真ん中、江刺区米里・人首地域の金山跡で拾った石の塊。なにげなく転がっていたうちのひとつだが、ていねいに洗うとご覧のような不思議な魅力漂う鉱脈の断片として甦った。江刺区米里の文化財調査委員会会長の利府さんに金山で栄えた米里地区の歴史を伺う。(中略)釣りをしながら川を歩いていると、よく砂地の川底にキラキラ光る粒を見つけることがある。その粒は、砂の上にまき散らしたようになっていて、

陽光を反射し黄金色に輝いている。足を踏み込めば砂とともに舞い上がって水中を乱舞し、とても綺麗だ。

その黄金色の粒を砂金だと勘違いする人がよくいる。

砂底に光るそれは「雲母（うんも）」という鉱物で、砂金ではない。

とあり、堀秀道『宮沢賢治はなぜ石が好きになったのか』（どうぶつ社 2006年12月）にも、中洲の先端の方の、逆光の中に、何かピカピカ光るものがたくさん見えてきた。はて何だろう。輝きの正体を見届けるべく、すこし水中に踏み込んで探すと、数ミリ大、無色透明の粒があちこちで光っている。手に取ると、ガラスのようだが、結晶面に囲まれ、そのぬれた面が斜めの日光を反射していた。それは小さい水晶、柱面がほとんどない、コロツとした形になっている。

「これは高温水晶だ！」と私は瞬間的に理解した。

と記されていること、「白い柔らかな円石もころがって来」とあることから川の源流付近ではなく石が転がって丸くなる程度に川を下った場所であると理解できるため、この作品の舞台は米里付近の人首川ではないかと推察できる。白い石、小さな錐状の水晶の粒、金雲母のかけらは花崗岩を想像させるが、米里には人首岩体という有名な花崗岩がある。

「郷土の企画展 奥州自然史紀行―地史編―」（奥州市牛の博物館 平成27年2月 [https://www.city.oshu.iwate.jp/htm/ushi/03\\_back/archives/03/01.pdf](https://www.city.oshu.iwate.jp/htm/ushi/03_back/archives/03/01.pdf)）には米里の人首岩体についての説明があるが、それを見ると「やまなし」にみられる川底の描写は、いかにも「石っこ賢さん」と呼ばれた賢治らしい表現といえる。

また、「種山ヶ原」という作品には、主人公の達二が「蟹を捕ることも木炭を焼く遊びも、もうみんな厭きていました。」や山男に向かって「うん。そんだったら許してやる。蟹を百疋捕って来。」と言う記述があり、種山ヶ原に連なる谷川にはカニが豊富にいたと推測できる。一方、「風の又三郎」には発破を仕掛けて魚を獲る場面があるが、大きな鮎だけではなく雑魚もたくさん流れてくるため、種山ヶ原付近の谷川にはさまざまな生物がたくさん生息していたことがわかる。

「北上川水系の流域及び河川の概要」（平成24年11月 国土交通省 水管理・国土保全局 [https://www.mlit.go.jp/river/basic\\_info/jigyo\\_keikaku/gaiyou/seibi/pdf/kitakami/h241114\\_4.pdf](https://www.mlit.go.jp/river/basic_info/jigyo_keikaku/gaiyou/seibi/pdf/kitakami/h241114_4.pdf)）にも、「魚類はウグイ、オイカワ、カマツカ、モツゴ、ニゴイ、フナ類などが、ほぼ全川に渡って生息」していると記されており、賢治の生きた時代にはさらに多くの魚類が生息していたと推測できる。

そして、「即戦力釣り情報サイトFishing Labo（岩手岩屋堂水位）」（<https://www.fishing-labo.net/modules/waterlevel/view.php?id=302041282204420>）に掲載されている「鳴瀬橋一人首川（岩手県：北上川水系：源流）の河川水位情報」を見ると、この辺の水深は約30cmあり、20cm程度のダイビングしかできないかわせみ（前述『鳥便り』）は、川底にある岩の下で暮らしているサワガニを獲ることはできない。「おれたちはかまわないんだから」という父ガニの言葉に象徴されるように、安全な場所なのである。

『心象スケッチ 春と修羅』の序に、

たゞたしかに記録されたこれらのけしきは

記録されたそのほとりのこのけしきで

それが虚無ならば虚無自身がこのほとりで

ある程度まではみんなに共通いたします

とあるが、このような心象スケッチで描かれた「やまなし」も、「どんぐりと山猫」に描かれている岳川の風景同様、現実の景色に近い心象の景色であると考えられる。

### 3. 「一.五月」について

「やまなし」に登場するカニは、サワガニが通説になっているが、谷川すなわちサワガニというわけではない。川に住むカニには他にもアカテガニやモクズガニなどもいるが、アカテガニは同じ川でも海に近い場所に生息し、時には海岸近辺の森林にいるなど比較的乾燥に強い種類でわずかな水を循環させながら生きていける反面、長時間水に浸かっていると溺れることもあるため、川底から川面を眺めている主人公と同種のカニではないだろう。また、モクズガニも成体は春以降夏の終わりまで淡水域ではほとんど採集されないことを考えると、結論としてサワガニということになる。

谷間を流れる川は一般的に下流の底質は泥で、中流では砂利、上流では大きな砂利や岩となっていることが多い。溪流というと、一般的に地形というよりは、溪流釣りなどのように、魚など生物の住む環境という視点から使われる傾向が強いようである。そのため、賢治も谷川という言葉を使用しているのかもしれない。

サワガニの生息場所は河川上流域や伏流部の湿地などである。冬眠期は岩の隙間や岩の下の穴の中であり、繁殖時期は春から初夏（文献によっては6月から10月）であり、水中で交尾した雌は卵が孵化するまでの約1ヵ月間、陸上で40個前後の卵を抱卵し、水中で孵化する。稚ガニは3～4年で成熟すると言われており、生涯谷川から離れて生活することがない唯一のカニである。

荒木晶・松浦修平の「サワガニの成長」(『九州大学農学部学藝雑誌』49号 九州大学農学部 1995年3月)には、

調査水域においては、12～3月の冬の間はカニは冬眠状態にあり、脱皮個体および活動個体は認められなかった。親ガニから離れた稚ガニに関しては、雌雄とも月別に比較したヒストグラムの峰が孵化当年には動かず、次年になってはじめて峰の成長が認められたことにより、孵化当年の稚ガニは脱皮をしないで冬を越すことが推定された。翌年以降は、年に2～3回の脱皮をすると推定された。最小成体サイズは、雄では甲幅約18mm、雌では約19mmと推定され、雌雄とも4才で繁殖に参加するようになると推定された。

とあることから、父ガニは様々な経験をした4歳以上であると考えられる。

本作品に母ガニが登場しないことに関して様々な説が述べられているが、その多くが母ガニの死亡説である。たしかに、サワガニは交尾中に雌が弱って死んでしまう、交尾に成功しても、雄が動きの鈍い雌を食殺してしまう等の共食いをすることもある。無事交尾に成功した雌は上陸し、陸上の湿った暗い場所を選び、腹筋、いわゆる「ふんどし」の内側に産卵・抱卵し、稚ガニが孵化すると、雌はまた水中生活に戻り、水流の緩やかな転石の下等で稚ガニを抱きながら隠棲し、稚ガニが自立できるようになると放仔する。このことから主人公の兄弟ガニの母親が無事に出産したことは明白であり、家族と離れたところで暮らしている可能性も否定できない。

本来、サワガニは縄張り意識が高く、共食いもするため、兄弟あるいは父子で一緒にいるのは本来少し不自然である。ではなぜ、賢治は父ガニと兄弟ガニと一緒に暮らしている設定にしたのだろうか。



自然環境から考察するならば、この谷川には食物が充分にあるためだと考えられる。サワガニは雑食であり、この谷川はやまなしが落ちてくるほどに自然が豊かだと考えられる。そして、生命力のある仲の良いサワガニの兄弟は、妹が病死してしまった賢治の希望でもあったのであろう。

賢治童話「二十六夜」では子梟の穂吉が、「ひかりの素足」では弟の檜男が死んでいる。これらの作品における早逝は「業」ではあるがそれが悪業ではなく、「転重軽受」として描かれているのではないだろうか。これは妹への挽歌でも同様であり、妹の早逝を「あたらしく天に生まれ」するための転重軽受としているからである。

その一方で、「洞熊学校を卒業した三人」のように悪因悪果となる死もあることを考えると、賢治作品における生死はそれぞれの過去世からの業による果であることがわかる。

また、子ガニを見守るのが母ではなく父であることも、賢治が仏教の慈悲を考慮して配置した可能性がある。『大智度論 卷二十七』に「大慈与一切衆生楽、大悲抜一切衆生苦」とあり、大慈とは一切衆生に楽を与え（与楽）無利益を除き、大悲は一切衆生の苦を抜き（抜苦）、無量の利益を与えることであると説かれているが、「やまなし」では、子ガニがさまざまな体験をするなかで、常に慈父である父ガニが教えを授け、子ガニを守護し、生の幸福を与える立場として描かれているからである。

また、兄弟の子ガニの、

『クラムボンはわらっていたよ。』

『クラムボンのかぶかぶわらったよ。』

『それならなぜクラムボンはわらったの。』

『知らない。』

(中略)

『クラムボンは死んだよ。』

『クラムボンは殺されたよ。』

『クラムボンは死んでしまったよ…………。』

『殺されたよ。』

『それならなぜ殺された。』 兄さんの蟹は、その右側の四本の脚の中の二本を、弟の平べったい頭にのせながら云いました。

『わからない。』

魚がまたツウと戻って下流のほうへ行きました。

『クラムボンはわらったよ。』

『わらった。』

(中略)

『お魚はなぜああ行ったり来たりするの。』

弟の蟹がまぶしそうに眼を動かしながらたずねました。

『何か悪いことをしてるんだよとってるんだよ。』

『とってるの。』

『うん。』

(中略)

お父さんの蟹が出て来ました。

『どうしたい。ぶるぶるふるえているじゃないか。』

『お父さん、いまおかしなものが来たよ。』

『どんなもんだ。』

『青くてね、光るんだよ。はじがこんなに黒く尖ってるの。それが来たらお魚が上へのぼって行っよ。』

『そいつの眼が赤かったかい。』

『わからない。』

『ふうん。しかし、そいつは鳥だよ。かわせみと云うんだ。大丈夫だ、安心しろ。おれたちはかまわないんだから。』

『お父さん、お魚はどこへ行ったの。』

『魚かい。魚はこわい所へ行った』

『こわいよ、お父さん。』

『いいいい、大丈夫だ。心配するな。そら、樺の花が流れて来た。ごらん、きれいだろう。』

という会話から、この兄弟ガニはクラムボンや魚という存在は知っているが、かわせみという鳥の存在や食物連鎖などの自然の理、そして「食べられる＝死ぬ」ということを知らなかったと理解できる。これらのことから、子ガニたちはこの年に初めての5月を経験したと考えられ、可能性としては、その年に誕生したか、前年の晩秋に母ガニから離れたかのどちらかであるが、その成長について、「二、十二月」の冒頭に「カニの子供らはもうよほど大きくなり」とあることから、その年に誕生した幼体であると考えられる。

一般にサワガニもかわせみの餌となるが、この谷川にはサワガニよりも捕食しやすい小魚などがたくさん生息していること、そしてカニの親子が岩かげに生息していることで、鳥に襲われることもなかったであろう。それゆえ、子ガニたちはかわせみや鳥という存在を知らなかったのである。

出産したサワガニの雌は放仔のため川に戻ってくるが、その際に、腹筋から水中にこぼれてしまった幼生がクラムボンではないかと考えられる。生存の可能性が究めて低いが、幼生であるがゆえに兄よりも幼生に近い弟のほうがクラムボンへの理解が深く、クラムボンを詳細に表現できたのであろう。つまり、クラムボンはCRAB (かに) BORN (生まれる) であろう。近い存在であるからこそ、兄弟ガニは水中で浮遊する幼生の表情を読み取ることができ、生存の条件から外れてしまった幼生は魚に食べられてしまう。そして、「お口を輪のように」してサワガニの幼生(クラムボン)を食べた魚がかわせみに食べられたと考えれば、食物連鎖という自然の理や因果応報に当てはまる。

ちなみに、クラムボンは「一、五月」に登場するが、「二、十二月」には登場しない。また、クラムボンに関しては、プランクトンからの造語や川エビ、カニ (crab) から造語、兄弟ガニの母蟹、兄弟の吹いている泡を指す等、先行文献でさまざまな指摘がなされているが、谷川雁は『賢治初期童話考』(潮出版社 1985年10月)で、

もしクラムボンが水棲昆虫の類なら、魚のエサになるおそれがあり、クラムボンのほのかな聖性は失われ、空間はどたばた劇の舞台になってしまう。

と記しており、魚の餌説を否定している。クラムボンが魚のエサになるとその聖性が失われてしまう

かといえ、そうともいえないだろう。なぜなら、多くの作品で因果応報や転重軽受による清浄を描いている賢治にとって、森羅万象は妙法蓮華経であるためありのままが尊いからである。

しかしながら、殺生は仏教の最大の罪であり、地獄に堕ちるとされているため、クラムボンを食べた魚がかわせみに食べられ、落命したことを父ガニは子ガニたちに「こわい所（地獄）にいった」と教えたのであろう。また、クラムボンが単に泡や自然現象（光等）であれば、「死んだ」「殺された」という表現ではなく、「消えた」「なくなった」等と表現すべきである。

また、聖性（holiness）とはもとキリスト教用語であり、教皇フランシスコは2014年11月19日の一般謁見演説「すべての人に対する聖性への招き」で『新約聖書』の「聖ペトロの第一の手紙」（4章10節）を引用し、

「あなたがたはそれぞれ、たまものを授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、そのたまものを生かして互いに仕えなさい。語る者は、神のこばを語るにふさわしく語りなさい。奉仕をする人は、神がお与えになった力に応じて奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して、神が栄光をお受けになるためです」

と述べている。この作品でクラムボンが神の与えた力を生かしているかということ、否であろう。それよりも、クラムボンが子ガニたちと同じ世界を共有していた近いものであると考えたほうが納得できるのではないだろうか。

また、谷川は同書で、クラムボンとは多彩なイメージに膨れ上がる「一つの隠語」であると指摘し、多くの研究でもクラムボンはその正体ではなく、語感やイメージを楽しむのがよいという方向になっている。

その理由の一つとして、「やまなし」が小学校6年生の国語の教科書に掲載されている「教材」であるということが大きく影響しているのではないかと考えられる。

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編 平成29年7月』の「国語科目標及び内容」の、「C 読むこと」の言語活動例の「第5学年及び第6学年」には、

- ア 説明や解説などの文章を比較するなどして読み、分かったことや考えたことを、話し合ったり文章にまとめたりする活動。
- イ 詩や物語、伝記などを読み、内容を説明したり、自分の生き方などについて考えたことを伝え合ったりする活動。
- ウ 学校図書館などを利用し、複数の本や新聞などを活用して、調べたり考えたりしたことを報告する。

と示され、また、「第3章各学年の内容」の「○精査・解釈（説明的な文章）」の「共有」にある「第5学年及び第6学年」の「カ 文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くこと。」に、

文章を読んで感じたことや考えたこととは、文章の構造と内容を把握し、精査・解釈することを通して、感想をもったり考えたりしたことである。これらの感想や考えは、同じ文章を読んでも文章のどこに着目するか、どのような思考や感情、経験と結び付けて読むかによって、一人一人に違いが出てくる。

これを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くとは、同じ文章を読んでも、一

人一人の感じ方などに違いがあることに気付くとともに、互いの感じたことや考えたことを理解し、他者の感じ方などのよさに気付くことが大切である。

とあるため、小学校6年生の国語教育では、読んで感じたことをお互いに発表し合い、生徒一人ひとりの気付きをお互いに理解することを大切にしていることがわかる。

しかしながら、気付きを得るためには、「C 読むこと」の言語活動例「第5学年及び第6学年」にある「ウ 学校図書館などを利用し、複数の本や新聞などを活用して、調べたり考えたりしたことを報告する」ことで、より深い学びを得るのではないかと考えられる。たとえば、「やまなし」を読む際に、サワガニの生態や岩手の自然などを授業で取り入れてみると、生徒の思考がさらに広がり、それが国語と自然科学が融合した総合学習へとなることで、さらに論理的な見方ができるのではないだろうか。

宮沢賢治の作品は、心象スケッチであるにもかかわらず、科学と相反しない。なぜならば、宮沢賢治自身が科学者だからである。宮沢賢治は科学者であり、心象スケッチという手法を駆使した作家であり、そして、森羅万象の法である妙法蓮華經を受持していた信仰者であった。

また、クラムボンを仏教用語の「仮名」(実体のないものに、仮に名づけること)とした西郷竹彦は、「〈やまなし〉は、いわば、仏教的世界観、さらにはアインシュタイン以後の今日の科学的世界観、つまりは作者賢治の世界観を象徴するもの」(西郷竹彦『新装版増補 宮沢賢治「やまなし」の世界』黎明書房2021年10月)としているが、「やまなし」という作品にも、当然のことながら、「諸法実相」(『妙法蓮華經 方便品第二』)をはじめとする妙法蓮華經の世界が描かれている。

賢治は、大正7年3月20日前後 保坂嘉内あて封書に「一切現象の当体妙法蓮華經」と記したように、森羅万象はすべからず妙法蓮華經であると考えていた。

「当体」については、「当体義抄」で日蓮が、

問ふ、妙法蓮華經とは其の体何物ぞや。答ふ、十界の依正即ち妙法蓮華の当体なり。問ふ、若し爾らば我等が如き一切衆生も妙法の全体なりと云はるべきか。答ふ、勿論なり。經に云はく「所謂諸法乃至本末究竟等」云云。妙樂大師云はく「実相は必ず諸法、諸法は必ず十如、十如は必ず十界、十界は必ず身土」云云。

と説いており、妙法蓮華經は「諸法実相」であり、万物の「当体」は妙法蓮華經である。ゆえに、クラムボンにも当然ながら「当体」があることになる。子ガニの兄弟が、

『お魚はなぜあへ行ったり来たりするの。』

弟の蟹がまぶしそうに眼を動かしながらたずねました。

『何か悪いことをしてるんだよとってるんだよ。』

『とってるの。』

『うん。』

と話していることから、魚がクラムボンを食べた(殺した)ために、「悪いことをしている」「とっている」という言葉がでたと考えられる。

もし、クラムボンという存在が、魚が通ったことで乱された光の屈折や泡だった場合、それは「悪いこと」「とっている」ことにはならず、魚によってかき回された水ならばすぐには元通りの「笑った」状態にもならないだろう。子ガニたちは魚に「殺され」て「死んだ」幼生とは別の幼生を見つけ、そ



れをまたクラムボンと言ったのではないだろうか。

ちなみに、「二. 十二月」では、クラムボンは登場しない。もし泡であれば川の流れて生じ、光であれば、日光でなくとも月光が差し込んでいるため、クラムボンは存在するはずである。

以上のように、「一. 五月」は美しい谷川を舞台とした大自然の厳しい理を子ガニの眼を通して描いた心象スケッチであると考えられる。

最後の「泡と一緒に、白い樺の花びらが天井をたくさんすべって来ました。」という表現は、山桜の花びらが散り、春の終わりを表しているが、「きれいだろう」という父ガニとは異なり、子ガニは「こわいよ」という。これは、かわせみが魚を捕りに上から飛び込んできた経験から、空から急に落ちてくるもの＝どこかに連れていかれる＝死と感じたからであろう。主人公のサワガニの世界は川底である。川底以外は未知の世界であり、川の上の見えないところから川に落ちてきた山桜（樺）の花が、魚をとったかわせみの恐怖をよみがえらせたのである。

かばの花が山桜であることは、中西市次『賢治童話『やまなし』を読む・川底の心象風景』（高校文化研究会 1988年8月）に、

「かば」が山ざくらの方言であること、また、かば（樺）を国語辞典でひかないで、漢和辞典で引いてみることを教示してくださったのは、宮澤清六氏であった。

とある。

子ガニにとってこの世界は未知であり、初めて体験することばかりであるが、父ガニが自然の理を一つひとつ丁寧に教え、子ガニが無事に成長できるように見守っている。また、父ガニは子ガニたちを守るだけでなく、生きる力を授けており、その経験と知識が子ガニの生きるための知識となり、これからも生き延びることにもつながっていく。父ガニが慈父たるゆえんである。

そして、無事に過ごした半年も終わり、次の年へと続く冬眠前の12月へと舞台が変わるのである。

#### 4. 「二. 十二月」

12月の川底は「白い柔らかな円石もころがって来、小さな錐の形の水晶の粒や、金雲母のかけらもながれて来てとまりました。」あることから、台風等により、上流から小石が流れてくるなどしたのであろう。5月とは違った川底の景色が描かれている。

しかも、

そのつめたい水の底まで、ラムネの瓶の月光がいっぱい透きとおる天井では波が青じろい火を、燃したり消したりしているよう、あたりはしんとして、ただいかにも遠くからというように、その波の音がひびいて来るだけです。

という描写からは、5月の昼間に描かれていた躍動感や、生命の息吹を感じさせる生き物の存在、生命の食物連鎖などがなく、サワガニの親子しか存在しない静けさや、冬を前にした川の冷たさが伝わってくる。

サワガニはもともと夜行性の生物であるため、5月の話では石の陰に隠れており、12月は夜の話であるため、石の陰から出ている。これも自然の姿そのままである。

また、12月になると子ガニたちの使用する単語も多くなり、話し方がいかにも少年らしくなる。ことに兄ガニは5月に比べるといかにも兄らしくなり、兄弟の差が明確になっている。同時期に生まれ

たにもかかわらず、兄弟間の差が広がっていくこともまた自然の厳しさである。

そのような兄弟のやり取りの最中に、突如「黒い円い大きなものが、天井から落ちてずうっとしずんで」くる。これがやまなしであるが、カニの兄弟はやまなしを知らなかったため、かわせみと勘違いをし、恐怖する。しかも、やまなしはかわせみよりも大きく重く、勢いよく身近に落下してきたのである。かわせみのみならず、白い樺の花びらでさえ恐怖の対象だったサワガニの兄弟にとって、このやまなしへの恐怖は大変なものだったに違いない。

ところが、このやまなしはかわせみとは異なり、サワガニたちの食べ物であり、美味しいお酒になると父ガニが教える。

かわせみ同様、見えないところから落下し、自分たちのテリトリーを犯すものであっても、自分たちにとって様々なもの、たとえば魚を獲ったかわせみは死をもたらす存在であり、正体がわからないために怖いと感じてしまった山桜の花は実は美しいものであり、そして、やまなしが自然の恵みであることなどを子ガニの兄弟は学んでいく。

多くの先行研究では、魚の「死」に対してやまなしは「生」の象徴としているが、これは魚が食べられる存在であるのと対照的に、やまなしがサワガニの親子の糧であると考えたからであろう。

ミツカン 水の文化センター「暮らしを支えた東北の果実―「イワテヤマナシ」の保全と利用」(<https://www.mizu.gr.jp/kikanshi/no68/04.html>) に、

イワテヤマナシの起源地は北上山系。ここには自生地があります。自ら種をつくり、実を落とし、それが発芽して次の世代をつくっています。(中略) イワテヤマナシにあって、今のナシにないもの。それは「香り」です。宮沢賢治が「やまなし」で書き残しているように、とても香りがいいんです。(中略) イワテヤマナシの自生地は湿地帯です。自生地は6月になってようやく奥の方に入れるほど雪深い。雪解け水があってじめじめしている水浸しの土地なんです、そこに去年落ちた実が発芽して生長していく。水がなければ、イワテヤマナシは育たないのです。

とあるが、やまなしの実が川に落ちてその種が下流に流され、どこかの湿地にたどり着き、そこで芽吹くという意味でも、魚の死とやまなしの生は対照的である。

しかしながら、かわせみは魚を食べたことで生命を永らえ、魚はかわせみの一部となって生き続ける。やまなしもまたサワガニの親子に食べられることでサワガニの一部となり、しかも川に流された種がやがてどこかの浅瀬で芽吹き新たな生命が誕生することを考えると、わざわざ「生」と「死」という区別をする必要はなく、すべてが因果応報であり、万物は妙法蓮華経となる。生物は生きるために他の命を食べる。サワガニも生きるためにまたやまなしを食べる。自然の理に善悪はないのである。

そのサワガニたちも冬を迎え、冬眠に入るが、「生」を表しているのは、やまなしよりもこのサワガニたちであろう。5月に出あったような激しい生存競争の中を半年生き延び、冬眠の準備をし、新たな春を迎えようとしているからである。天井から落ちてきたやまなしは、このようなサワガニたちの生への祝福ではないだろうか。

「やまなし」という作品は、谷川で繰り返される生と死の大循環、因果応報を見つめる物語である。

谷川雁が前述『賢治初期童話考』で「秋の部はおそらく11月上旬であろう。「やまなし」の実が落ちずに残っているぎりぎりの時期である」と述べているが、一般的に考えてもそれが正しいように思われる。

国土交通省HPの「平年値（霜・雪・結氷の初終日と初冠雪日）盛岡 平年値（霜・雪・結氷の初終日）」（[https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/nml\\_sfc\\_season.php?prec\\_no=33&block\\_no=47584&year=&month=&day=&view=](https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/nml_sfc_season.php?prec_no=33&block_no=47584&year=&month=&day=&view=)）によると、氷結は10月31日、雪の降り始めは11月9日、1 cm以上の積雪は11月27日とあるが、この記録は1991年から2020年であるため、賢治の時代ではさらに降雪時期は早かったはずである。ではなぜ、賢治はわざわざ「十二月」としたのであろうか。11月に最愛の妹を失ったことも影響しているかもしれないが、サワガニが冬眠する直前にやまなしの実が落ちるとい話を書きたかったのではないだろうか。

青森のりんご農家では「木守り」といって、収穫の最後に一つだけりんごを残すという。これは収穫の感謝をささげるとともに来年の豊作を畑の神様にささげる風習であるといい、「きまもり」とも呼ばれ、津軽地方では「鳥っこさあげりんご」として野鳥たちへの餌として残している農家もあるとのことであり（「弘前のリンゴ畑で「木守り」収穫への感謝と来年の豊作祈る。」『弘前経済新聞』<https://hirosaki.keizai.biz/headline/1118/>）、最後のりんごに今年の収穫への感謝と来年の豊作の祈りを込めるとある。

このやまなしもまた、大自然の「木守り」なのではないだろうか。そして、その最後の一つが激しい生存競争の中で生き残り、大人になっていくサワガニの兄弟と、我が子の成長を見守る父ガニに対する自然からの恩寵として落下してきたと思われる。

また、父ガニの「あしたイサドへ連れて行かんぞ。」という言葉から、子ガニたちが成長し、5月よりも行動範囲が広がったことがわかる。

この「イサド」については、前述のように「岩谷堂」がモデルの造語だと考える先行文献もあるが、岩谷堂付近の川とサワガニとの関連が不明である。

それよりも、12月になり、子ガニの行動範囲が広がったため、住处と離れた場所にも出かけることが可能になったことを考えても、「イサド」とは住处とは離れた砂地等と考えた方が自然ではないだろうか。

また父ガニの「もうねろねろ。遅いぞ、あしたイサドへ連れて行かんぞ。」という言葉から、イサドは子ガニたちが楽しみにしている場所であることを考慮すると、「イサド」は地名というよりは住处とは異なる場所であり、異なるエサが取れる場所、すなわち、異砂土、石砂土ではないかと考えられる。サワガニの親子は冬眠を前に、普段と異なる場所に御馳走を食べに行くのであろう。

## 5. まとめ

「やまなし」という名の作品でありながら、やまなしが登場するのは岩手の晩秋というよりも冬の初めである12月、サワガニが冬眠する直前の話のみである。

この作品は、5月と12月に分かれているが、主人公の幼いサワガニの兄弟が大自然の理の厳しさを学びながら川底で生き抜き、そして、最後に大自然からやまなしという祝福を授けられる構成となっている。小さなサワガニは谷川の生態系では決して強者とは言えず、どちらかと言えば、捕食される確率が高い生き物である。

賢治は「春と修羅」で、

いかりのながさまた青さ

四月の気層のひかりの底を  
唾きし はぎしりゆききする  
おれはひとりの修羅なのだ

と述べているが、同じ水の底から水面を見上げるサワガニの兄弟は、修羅のような怒りの心をもってはいない。あるのは好奇心と生命の謳歌、死への恐怖である。単純な感情ではあるが、非常に純粋な感情でもある。

しかしながら、自らを修羅と名乗った賢治にとって、この無垢な感情はなによりも尊かったに違いない。法華經の行者である賢治は、つねに菩薩の請願である四請（「衆生無辺誓願度 煩惱無数誓願斷 法門無尽誓願知 仏道無上誓願成」）を祈ってはいたが、現実には自らを「修羅」と卑下するような状況だった。そのような賢治が大正7年3月14日前後、保坂嘉内あて封書の最後に

妙法蓮華經 方便品第二  
妙法蓮華經 如来寿量品第十六  
妙法蓮華經 觀世音菩薩普門品第二十四  
願はくは此の功德を 普く一切に及ぼし  
我らと衆生と 皆共に仏道を成ぜん

と記し、「乃至法界平等利益 自他俱安同歸寂光」を祈っている。賢治の生涯をかけた一番の願いは『妙法蓮華經 化城喻品第七』に説かれている「願以此功德 普及於一切 我等与衆生 皆共成仏道」である。しかしながら、生物は弱肉強食や食物連鎖等、自らの生命を維持するために他の生命を食べなければならず、賢治が「ビジテリアン大祭」でそれを描いているように、生物は生きるために殺生の罪を背負わなければならない。しかしながら、これも万物の法である。このような大自然の中において、川底の小さなサワガニの兄弟は無心に生きている。それは修羅の感情に満ちた賢治にとって、なによりも尊い存在であったのだろう。

大正9年6月～7月、保坂嘉内あて 封書に「人間の世界での修羅の成仏」、「本当にしっかりやりますよ」と記し、最後に「しっかりやりますよ」を21回も記している。

この物語は川底の青い幻燈であるが、弱肉強食や食物連鎖、生と死、生命の尊厳、親兄弟の存在意義、自然の恵み等、様々な森羅万象の理がサワガニの兄弟を通して美しく描かれている。それは、恐ろしくも慈悲深い大自然の営みそのものであり、諸法実相でもある。

#### 参考文献)

- 宮沢賢治『新校本 宮沢賢治全集』11-16巻及び補巻 筑摩書房 1995年12月-2009年3月  
『平成新編 日蓮大聖人御書』大石寺 1997年5月  
島地大等『漢和対照 妙法蓮華經』ニチレン出版 2011年4月  
西郷竹彦『新装版増補 宮沢賢治「やまなし」の世界』黎明書房2021年10月  
中西市次『賢治童話『やまなし』を読む・川底の心象風景』高校文化研究会 1988年8月  
渡部芳紀『宮沢賢治大事典』勉強出版 2007年8月  
原子朗『新 宮沢賢治語彙辞典』東京書籍 1999年7月  
『宮沢賢治の全童話を読む』『國文學増刊(2003・2)』學燈社 2003年5月  
堀秀道『宮沢賢治はなぜ石が好きになったのか』どうぶつ社 2006年12月



- 谷川雁『賢治初期童話考』潮出版社 1985年10月
- 日置俊次「宮沢賢治が求めた先—法華文学としての「やまなし」—」(青山大学文学部紀要) 57号 2015年)
- 日置俊次「宮沢賢治「やまなし」再論」(『青山語文』43号 青山学院大学日本文学会 2013年3月)
- 日置俊次「宮沢賢治論—「雪渡り」から「やまなし」へ—」(『青山語文』45号 青山学院大学日本文学会 2015年3月)
- 鈴木健司「宮沢賢治作品における造語機能の分析—童話「やまなし」にみられるくくらムボン」に絡めて—」(『文教大学国文』) 文教大学国語研究室、文教大学日本語日本文学科研究室、文教大学国文学会 2020年3月)
- 小埜裕二「美と無垢と—「やまなし」論—」(『日本文学』44号 日本文学協会 1995年12月)
- 片山寛則「新規ナシ遺伝資源としてのイワテヤマナシ～保全と利用の両立を目指して～」(『作物研究』64号 近畿作物・育種研究会 2019年)
- 中村和歌子「賢治童話「やまなし」」(『横浜国大國語研究』5号 横浜国立大学国語国文学会 1987年3月)
- 荒木晶・松浦修平「サワガニの成長」(『九州大學農學部學藝雜誌』49号 九州大學農學部 1995年3月)
- 「種山ヶ原住田町HP」(<https://www.town.sumita.iwate.jp/kanko/taneyama.html> 2022年9月25日12時52分最終閲覧)
- 「鳥便り(カワセミ)」(<http://akaitori.tobiiro.jp/kawasemi.html> 2022年9月25日12時55分最終閲覧)
- 「ササラ風土見聞録 黄金の山」([https://www.thr.mlit.go.jp/isawa/sasala/vol\\_45/vol45\\_2m.htm](https://www.thr.mlit.go.jp/isawa/sasala/vol_45/vol45_2m.htm) 2022年9月25日12時56分最終閲覧)
- 「北上川水系の流域及び河川の概要」(201211月 国土交通省 水管理・国土保全局 [https://www.mlit.go.jp/river/basic\\_info/jigyo\\_keikaku/gaiyou/seibi/pdf/kitakami/h241114\\_4.pdf](https://www.mlit.go.jp/river/basic_info/jigyo_keikaku/gaiyou/seibi/pdf/kitakami/h241114_4.pdf) 2022年9月25日12時28分最終閲覧)
- 「即戦力釣り情報サイト Fishing Labo (岩手岩屋堂水位)」(<https://www.fishing-labo.net/modules/waterlevel/view.php?id=302041282204420> 2022年9月25日13時3分最終閲覧)
- 「郷土の企画展 奥州自然史紀行—地史編—」(奥州市牛の博物館 2015年2月 [https://www.city.oshuiwate.jp/hm/ushi/03\\_back/archives/03/01.pdf](https://www.city.oshuiwate.jp/hm/ushi/03_back/archives/03/01.pdf) 2022年9月25日 13時5分最終閲覧)
- 太田川河川事務所 (<https://www.cgr.mlit.go.jp/oitagawa/Bio/shell/index320.htm> 2022年9月25日13時43分最終閲覧)
- 『大智度論』国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2544282> 2022年9月25日13時47分最終閲覧)
- 『大涅槃経』国立国会図書館デジタルコレクション (<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/969515> 2022年9月25日 13時50分最終閲覧)
- 教皇フランシスコ一般謁見演説「すべての人に対する聖性への招き」2014年11月19日  
(<https://www.cbci.catholic.jp/2014/11/19/9048/> 2022年9月25日14時3分最終閲覧)
- ミツカン 水の文化センター「暮らしを支えた東北の果実——「イワテヤマナシ」の保全と利用」  
(<https://www.mizu.gr.jp/kikanshi/no68/04.html> 2022年9月25日14時15分最終閲覧)
- 国土交通省HP「平年値(霜・雪・結氷の初終日と初冠雪日)盛岡 平年値(霜・雪・結氷の初終日)」  
([https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/nml\\_sfc\\_season.php?prec\\_no=33&block\\_no=47584&year=&month=&day=&view=](https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/nml_sfc_season.php?prec_no=33&block_no=47584&year=&month=&day=&view=) 2022年9月25日14時20分最終閲覧)
- 「弘前のリンゴ畑で「木守り」収穫への感謝と来年の豊作祈る。」  
(『弘前経済新聞』 <https://hirosaki.keizai.biz/headline/1118/> 2022年9月25日14時21分最終閲覧)
- 通商産業技官 広川 治他5 萬分の1地質図幅説明書 人首(秋田—第43号) 地質調査所 昭和29年  
[https://www.gsj.jp/data/50KGM/PDF/GSJ\\_MAP\\_G050\\_06043\\_1954\\_D.pdf](https://www.gsj.jp/data/50KGM/PDF/GSJ_MAP_G050_06043_1954_D.pdf) 2022年9月25日15時1分閲覧)
- 文部科学省【国語編】小学校学習指導要領(平成29年告示)解説  
([https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_002.pdf) 2022年10月2日16時00分最終閲覧)
- 岩手県HP (<https://www.pref.iwate.jp/kensei/profile/1000649.html> 2022年10月3日22時2分最終閲覧)
- 東北大学植物園 (<http://www.biology.tohoku.ac.jp/garden/birds.htm> 2022年10月5日12時最終閲覧)

Study of MIYAZAWA Kenji's fairy tale "YAMANASHI"

TAKAHASHI Naomi

**Abstract**

This story is a mental sketch depicted through the eyes of a crab that is looking up at the surface river's from the riverbed. The work beautifully depicts the harsh nature such as the predation of the weak and the strong, the food chain as well as the reason of all things in the forest, such as death, the life's preciousness, and the families significance. It is the works of nature like terrifying and benevolent.

The work also depicts cause and effect and the cycle of life. The kawasemi eats the fish to prolong its own life, while the eaten fish becomes part of the kawasemi and continues to live. In this way, the mountain pear also becomes a part of the crab and that child's prolonging the life by being eaten. The seeds of the wild pear may also reach the shallows somewhere and sprout there. This cycle of life is also depicted in the work. The work also shows that life and death are all a result of cause and effect, and that these things exist because of cause and effect.

**Keywords:** Yamanashi, Sawagani, natural reason, life, death, cause and effect, mental sketch